椋鳥日記

小沼丹

椋鳥日記

小沼丹

河出書房新社

椋鳥日記

昭和四十九年六月十日　印刷
昭和四十九年六月十五日　発行

定価は函・帯に表示してあります

著者　小沼　丹
発行者　中島隆之
印刷者　中内佐光
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の六
電話東京（292）三七一一番（代表）
振替　東京一〇八〇二番

（乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします。）

印刷・暁印刷　製本・小泉製本

©1974 Tan Onuma Printed in Japan

椋鳥日記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ウエスト・エンド・レイン

倫敦ではウエスト・エンド・レインと云ふ通に面した家に住んでゐた。倫敦には真直ぐな道が尠いやうだが、この通も何となく曲りくねつてゐる。窓から顔を出して見ても、左は半町ばかり先で右に大きく曲つてゐて、赤煉瓦の四階建の家竝が右手の巨きな馬栗の木の蔭に消えてしまふ。右は半町と行かない裡に右に曲つて、その辺は巨きな鉛懸の緑しか見えない。

レインと云ふから小路かと思ふと、赤い二階バスの通るかなり広い道で、車が方向転換するぐらゐの余裕は充分ある。倫敦に着いた日、迎へに来て呉れた友人達や娘とタクシイに乗つた。此方は西も東も判らないが、話に聞いた古めかしい黒い箱型の車に乗ると如何にも倫敦に来たと云ふ気分になる。

初めて見る町を物珍しく眺めてゐたら、友人や娘が仕切の硝子を叩いて、行き過ぎたからバックしろと運転手に云つてゐる。運転手が番地を間違へたらしい。途端に運転手は車を一

回転させると、斜めに往来を横切つて道の右側に車を停めたから吃驚した。その后、何度かそんな例を見たから交通違反ではないのかもしれない。

この通に面した、赤煉瓦の古ぼけた三階建の家の三階のフラットを借りて住んでゐた。一階から二階へ上る途中の踊場の所に大きな窓があつて、三十坪ばかりの裏庭が見える。余り手入してゐないらしく、何となく荒れた感じのする庭だが、初めて見たときは隅の方に白い山査子の花が咲いてゐた。淡紅色の石楠花も咲きかけてゐたやうである。

三階に上ると短い廊下があつて、扉が二つ向き合つてゐる。その左の扉が我家の入口で、入口の扉を開けると小さなホオルがあつて、ホオルに面して扉が四つあつた。突当りは台所で、左手には二十畳ばかりの部屋がある。右手に二つ並んだ扉は、十五、六畳ぐらゐの寝室と八畳程の風呂場兼手洗に通じてゐる。

寝室には造附けの衣裳戸棚や衣裳箱笥等があるが、その部屋は娘に明け渡したから、当方は広い方の部屋の片隅に寝台を入れて専らそこで過した。尤も、食卓もこの部屋にあるから、食堂でもある。部屋の真中に小卓子があつて、その四囲に肘掛椅子が置いてある。だから、ときどき客間にもなるのである。

その他小型のビユウロオとか、電話器の載つた低い戸棚等も置いてあつた。それは必要だ

からいいが、不細工なホオム・バアの台があつて、これは眼障りでならなかつた。家を借りるとき、家主のレニイ夫人が娘に、お父さんはお酒は飲むかと訊いた。娘が飲むと答へたら、にこにこしてその台を運び込ませたと云ふ。そんな経緯を聞くと、邪魔だから廊下に出してしまへと云ふ訳にも行かない。

台所には冷蔵庫もあつて、食器戸棚には一応食器類も揃つてゐるから生活を始めるには困らない。云ひ替へると、后は娘の作る料理を食つてゐればいいと云ふことである。困つたのは、前がバス通だから他の車も通る。頻繁に通る訳ではないが、気にするとうるさい。それがウエスト・エンド・レインから一歩横町に入ると、車は滅多に通らないばかりか通行人も殆ど見掛けない閑静な路になるから、些か残念な気がする。

横町を散歩しながら、

——この辺なら静かで良かつたな……。

と思ふが、それは欲張りと云ふものかもしれない。娘が三、四日先に倫敦に向けて出発するとき、どんな所でもいいから親爺が倫敦に着いたら空港から真直ぐ入れる家を探して置け、と吩附けた。その吩附通りにこの家を見附けたのだから、文句は云へない。

娘は前に倫敦に来てゐて、何とか夫人と云ふ奥さんを知つてゐる。その女性がこの家の持

主のレニイ夫人と知合だつたから、その紹介で借りられたのである。手紙で連絡はしたらしいが、三、四日で探したのだから感心だと云つた方がいい。

何でも前に住んでゐた独逸人の夫婦者が出て間も無いときで、家主の方では部屋の模様替をするつもりだつたらしい。しかし、三、四日の裡に父親が来るからと云ふことで、模様替は中止になつた。だからカアテンや絨毯が多少汚れてゐても止むを得ない。多少車がうるさくても、我慢する他ない。

家主のレニイさんは旦那さんとどこか別の所に住んでゐて、その姉のアイリス・ハリスと云ふ独身者の女性が管理人として一階に住んでゐた。この家の左右には同じ造の家が一軒づつあつて、それもレニイさんの持家だつたから、ハリス婆さんは二つの横町に挾まれた三軒の家の管理人でもあつた。

ハリス婆さん、と云ふと娘は、

——婆さんなんて云つちや悪いわ……。ハリス小母さんは可愛いぢやないの。

と云ふが、此方は一向に可愛いとは思はなかつた。家主のレニイさんはときどき管理人の姉の所にやつて来るらしかつた。小柄な愛敬のある顔をした女性で、四十歳ぐらゐに見える。

姉のハリス婆さんは四十四、五歳かもしれない。妹より背が高くてほつそりしてゐる。何故ハリスさんを婆さん呼ばはりしたのか、その辺の所は良く判らない。いつも片手に烟草を持つてゐて、顔を合せると小首を傾げ、ちよいと気取つて烟草を持つた手を挙げて会釈する。

——何だい、この婆さん……。

最初見たとき、そんな気がしたのかもしれない。

倫敦に着いたのは四月の末で、近所のライラックの蕾が脹んでゐたが、部屋には暖房が入つてゐて、歩いてゐる人もコオトを着てゐる方が多かつた。外套を着て、厚い襟巻をしてゐる爺さんもゐて、おやおや、と思つた記憶もある。着いて二、三日したころ、娘と外出しようとして降りて行つたら、ちやうど玄関から入つて来たレニイさんに会つて、そのとき初対面の挨拶を交した。レニイさんもコオトを着て頭に布を被つてゐた。

娘が家を借りるときレニイさんは、お父さんが気に入つて下さるといいけれど、と頻りに気にしてゐたさうだが、このときも初対面の挨拶が終ると早速、住居は気に入つたかと訊いた。住居そのものは申分無いが、車がうるさいのが閉口だ、さう云つたらレニイさんは眼を丸くして、

——慣れればそれ程気にならなくなるでせう。どうぞ早く慣れて下さるやうに……。

と云つた。何だか変な論法だと思つたが、礼儀として、慣れるやうに努めませうと答へたら先方はたいへん嬉しさうな顔をした。貸借の正式の書類に署名したのは、それから一週間ばかり経つてからである。

三階には裏庭に面した方にもフラットがあつて、若い夫婦者が赤坊と一緒に住んでゐた。二ヶ月程してその夫婦者が出たとき、良かつたら其方へ移つてもいいと云はれて覗いたことがあるが、部屋が小さくて間取が悪い。それに面倒臭いので移らなかつたが、そのころはもう車の騒音にも大分慣れてゐたのかもしれない。

ハリス婆さんと初めて話をしたのも、その家に入つて間も無いころである。ある日、娘が買物に出掛けたから倫敦の地図を拡げて見てゐたら、扉を叩く音がする。出て見ると温和しさうな中年男が立つてゐて、呼鈴が故障してゐるから直しに来たと云つた。ちやんと背広を着て、ネクタイも締めてゐる職人だから恐れ入る。呼鈴は二つあつて、一つは階下の玄関に訪ねて来た人が鳴らす奴で、もう一つは三階の入口の呼鈴である。それが故障してゐたとは知らなかつた。五、六分したら直つて、男が帰つて行つたからまた地図を見てゐると、直つたばかりの呼鈴が喧しく鳴つた。

扉を開けたらハリス婆さんが烟草片手に立つてゐて、小首を傾げて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――今日は……、御機嫌如何？

と云つた。呼鈴がちやんと直つたかどうか様子を見に来たのである。それから、何か不満は無いか、もしあつたら云つて欲しい、明日新品の敷布と取替へるからとかいろいろ喋る。レニイさんは早口だから聴き取り難いことがあるが、ハリス婆さんはのんびり喋るから判り易い。淡紫のセエタアを着て、腕組なんかして立つてゐる。

――日本の烟草を喫みますか？

と訊くと、ハリス婆さんは階下の鍵を掛けて来るからと降りて行つたから意外な気がした。我家に坐つて一服、と云ふつもりらしい。二、三分したらまた上つて来たから小卓子に向ひ合つて坐つた。ホオプに浮世絵燐寸を附けて進呈したら頗る喜んで、この燐寸は使はないで蔵つて置くと云ふ。

小卓子の上にトランプ札が置いてあるのに眼を留めて、何をやるかと訊く。娘とセヴン・ブリッヂをやる、それから独占ひもやると云ふと、その遣方を説明しろと面倒な注文を出すから閉口した。上手く説明出来ないが先方は勝手に呑込んだ顔をして、今度一緒にブリッヂをやらうと云ふ。それから、近い裡に御二人を招待するから珈琲を飲みに来て欲しい、但し今週は忙しいから……、と云つて腕時計を見ると、

——妹が来る時間だから……。

と立上つた。

そこへちやうど娘が帰つて来た。ハリス婆さんは娘に愛想良く声を掛けると、片手を振りながら出て行つた。やれやれと思つてゐたら、娘が、

——悪かつたかしら……。

と云ふ。

——何が？

——だつて、あたしが帰つて来たらハリス小母さんはすぐ出てつたでせう？　もつと話してゐたかつたんぢやないのかしら？

レニイさんが来るからだと教へてやつたが、娘は何を考へてゐたのか良く判らない。ハリス婆さんはその后もちよいちよい上つて来て、その度に珈琲を飲みに来て呉れと云つたが一度も行かなかつた。面倒臭い気がしたからだが、后から考へると、ではいつ伺へば宜しいかと訊くのが礼儀と云ふものだつたかもしれない。

建物は全館暖房になつてゐたから、三階の二つの部屋の煖炉は鉄の板で塞いであつた。何

でも煖炉が使用禁止になつたためらしい。広い方の部屋の鉄板には、誰が貼つたのかゴツホの自画像の複製が貼つてあつた。以前のことは知らないが、古い家は何れも屋根の上に煖炉の烟突を並べてゐる。それが一斉に烟を吐いたら、冬の倫敦は嘸烟だらけだつたらうと思ふ。

昔は朝早く、倫敦の町を烟突掃除人が廻つたらしい。煤だらけの顔をした小さな子供の掃除人の呼声は、若い雀の囀にそつくりだと書いてあるのを読んだことがある。そんな呼声はもう聞きたくとも聞けないが、倫敦に着いた翌朝、ウエスト・エンド・レインに奇妙な呼声を聞いた。

遠くの方で誰か大声で怒鳴つてゐる。何だらうと思つてゐると、その声が近附いて来て、同時に馬の蹄の音も聞える。窓から往来を見ると、右手の方から馬の牽く荷車が一台やつて来た。荷車はタイヤの附いた二輪車で、前の方に一段高い台があつて禿頭の親爺が手綱を持つて坐つてゐる。荷台には何だか得体の知れないがらくたが積んである。それを小振りの足の太い頑丈さうな馬が、ぱかぱか牽いて行くのである。

——……。

ときどき禿頭の親爺が大きな声で怒鳴るが、何と怒鳴つてゐるのか判らない。リツタアと聞えるが、違ふかもしれない。しかし、屑屋には間違ないから、屑屋お払ひ、と怒鳴つてゐ

るのだと思ふことにした。この屑屋は週に一度か十日に一度ぐらゐ廻つて来たやうである。足首の太い頑丈さうな馬が、健気な感じでぱかぱか小走りに行くのは大いに気に入つたから、来ると覗いて見る。

二、三日してまた蹄の音を聞いた。今度は声がしない。窓から覗くと、騎馬警官が馬に乗つて行くのである。この馬は荷車を牽く奴とは違つて、足も細くて恰好はいい。いつだつたか小雨の降る日騎馬警官を見たが、馬上に長い外套の裾を翻へして颯爽とした姿に見えた。若い警官自身、自分の姿を意識して馬を走らせてゐたやうに思はれる。往来に蹄の音を聞くと、失つたものが甦る気がして懐しかつた。昔は東京でも荷馬車や馬に乗つた人を見掛けたが、いつから見掛けなくなつたのかと思つたりする。

玄関を出て、ウエスト・エンド・レインを左に歩いて行くと十分ばかりで地下鉄のウエスト・ハムステッド駅に出る。その間は三階建か四階建の赤煉瓦の家並の続く住宅街で、大抵小さな前庭に芝を植ゑて花を作つてゐる。途中の左手に、小さな城のやうな教会がある。信号のある街角には赤いポストがあつて、その先で道は左へ曲つてゐる。その辺迄来ると、ライラックの茂みの奥に、可愛らしい二階家が見えたりする。ときどき赤い二階バスや車が通

るが、表通にしては車の往来は尠い方かもしれない。歩いてゐる人間は車より遙かに尠い。

駅に近くなると小さな商店街があつて、街角の最初の店が酒屋であつた。眼鏡を掛けた痩せてひよろりとした親爺が主人で、細君は肥つてずんぐりしてゐた。昔、マザア・グウスの本で、ジヤツク・スプラツトと云ふ童謡を読んだことがある。痩せたジヤツク・スプラツトが肥つたお神さんを手押車に乗せて押して行くと、車が引繰り返つてお神さんが路傍の溝に落ちた。お前、溺れやしないかね？　と亭主のジヤツク・スプラツトが訊いたら、溝のなかのお神さんが答へた。溺れないと思ふの、だつて水が無いんだもの。

酒屋の夫婦を見てゐて、ひよつこりジヤツク・スプラツトを想ひ出した。昔読んだ本に載つてゐた挿絵の夫婦に、そつくりだつたせゐかもしれない。それから酒屋の亭主に、ジヤツク・スプラツトと名前を附けた。

この角の酒屋でいつも酒を買つた。

かなり大きな店で、硝子の扉を押して入ると鍵型の長いカウンタアがあつて、ジヤツク・スプラツト親爺はいつもそのなかに、酒の壜の一杯詰つた棚を背負つて坐つてゐる。ときどき、お神さんも一緒に坐つてゐた。

初めてシエリイを買ふとき、どれが良いか判らない。亭主にいいと思ふ奴を呉れと云つた

ら、暫く棚を見てゐて一本引出して寄越した。割引して九十九ペンスだと云ふから、何だか可笑しい。その次行つたとき、こなひだのシエリイは甘口だつたから、辛口があつたらその方がいいと云ふと、ジャック・スプラット親爺は吃驚したやうな顔をして傍のお神さんと顔を見合せた。それから親爺は指先で顎を撮みながら、低声でお神さんと何か話してゐた。多分、相談したのだらうと思ふ。一分ばかりしたら話が纏つて、ジャック親爺は棚からシエリイを一本引出した。またお神さんと顔を見合せて、大きく点頭いてからそれを寄越した。これは前の奴より安くて七十五、六ペンスだつたと思ふが、前の奴より淡白で良かつた。

ある日、酒屋の前を通つたら、カウンタアのなかにジャック親爺の替りに若い女性が坐つてゐるのが見えた。その次行つたときはもうゐなかつた。その后二度と見掛けない。どう云ふことなのかさつぱり判らないが、わざわざ親爺に訊く程のことでもない。

この店ではギネスや丁抹のカアルスバアグと云ふビイルも買つた。最初カアルスバアグを買ふとき、亭主が強いのと弱いのとどちらにするかと訊いた。強い方は特別醸造と云つて一本十七ペンスだが、弱い方は十一ペンスだと云ふ。強い方を半打買つたら、ジャック・スプラット親爺は勘定台越しに身を乗出して、低声で、

——前の酒場で、夜、こいつを注文してごらんなさい、一本二十八ペンスも取られますよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com